釧路市立北中学校「学校だより」

北　魂

令和５年（2023年）４月17日発行　VOL ３

ポスト学制～学びの変革～

釧路市立北中学校長　冨　田　直　樹

明治５年に、全国規模の近代教育法令である「学制」が公布され、令和４年に150年を迎えました。これまでの日本型学校教育は、学習、生徒指導、地域社会との連携など、広範囲にかかわる全人的な教育の提供が行われてきました。この点は、諸外国から高く評価されていて、献身的な教師や関係者によって、日本型学校教育は支えられてきました。

しかし、150年が経過しても、教師は黒板とチョーク＆トーク、生徒は紙の教科書にノートと鉛筆という昔からほぼ変わらない風景が全国の学校にはあります。２年前から「GIGAスクール構想」の実現を目指した各種取組が開始され、生徒に１人１台の端末が貸与されたり、デジタル教科書が普及したりしているものの、その活用は自治体によって、また、学校（管理職）や教師の意識によって大きな差がある、これが現実です。

生徒たちが社会人として活躍する社会（2040年代）は「Society 5.0（超スマート社会）」と呼ばれています。この社会を表す言葉としてよく耳にするのが、「シンギュラリティ」です。意味は、「人工知能（AI）の能力が人間の能力を超える」ということです。そして、その社会では「人工知能（AI）に仕事が代替されることによる失業」が頻発するであろうという予測がされています。

生徒たちに今、そしてこれからの時代を生き抜くために求められているのは、自己効力感、自信、自尊心を培うことであり、自分で学びの羅針盤をもって、その生徒らしいやり方でペースをもって道を切り拓いていく自己調整、自己決定ができることだと考えます。このことを実現するために、学校には「学びの変革」に真剣に取り組むことが求められているのだと受け止めます。学校における「学びの変革」について、埼玉県戸田市教育委員会教育長の戸ヶ崎勤氏は次のように述べています。

戸ヶ崎　勤　氏

子どもたちが大人になる未来を見据えた教育が行われる学校をつくりたいと考え、学校経営を行ってきました。それは、「児童・生徒の出て行く社会を知ろうとしないのは、極めて不誠実」との考えからです。私の教育改革のマインドセット（考え方）は、学校の止まっている時間を動かし、学校という学びの場を「子どもたちが未来を感じられる空間にする」ことです。

新学期が始まって２週間が経過しました。この間の本校を見ていると、確実に時間を動かしていると実感します。しかし、今後は、「生徒たちが今以上に未来を感じられる学校」になるべく、未来を見据えた学校経営、教科等経営、学級経営等を加速させる必要があると考えます。